

明治四十五年七月一日發行

十全會雜誌

第七十卷
第七號
(第七十八號)

全澤醫藥專門學校十全會

十全會雜誌 (第十七卷第十七號) 目次

○原著及實驗

●酸性常尿及「ウロトロビン」内服尿中ニ於ケル化膿菌
并ニ綠膿菌ノ發育ニ關スル細菌學的試驗。

海軍々醫中監 鈴木寛之助 一

○雜 纂

●脂肪染色。(承前) 京都醫科大學解剖學教室 岡島敬治 七

○漫 錄

●刑法と醫師。 法學博士 花井卓藏 二四

○通 信

●李廷擢君通信。 ●原田悦五郎氏通信。 ●福田美明氏通信。 ●小俣幹
翁氏通信。

○校內雜報

●植物採集の記。 ●第七回香林會。 ●第十二回講話部大會記事。

○叙任及辞令

●陸軍省。 ●海軍省。 ●石川縣。 ●金澤醫學專門學校。

○人 事

●館保二氏の開業披露。 ●中川善松氏。 ●鈴木彌氏。 ●太田尙男氏。
●寺尾敬三氏。 ●加勢順之助氏。 ●安達銷吉氏。 ●居所不明會員薄。

○會 告

●十全會規則改定ノ件。
●校外特別會員會費領收調書。



雜 纂

濾。井水ニテ「ヘマテイン」ヲ青變セシム。

九、僱里設林又ハ僱里設林阿膠中ニ臍包ス。

其他ノ法

Rieder 氏ハ九十六%ノ亞爾箇保爾飽和液ヲ以テ分泌物、排泄物ヲ檢シ。
Levinsohn 氏ハ飽和亞爾箇保爾性液二分、十%「フォルマリン」液一分二同
量ノ被檢液ヲ混シテ沈降セシメテ檢セリ。

(備考。)

固定ハ又五%ノ「フォルマリン」液又ハ Müller 氏液ヲ用ケルモ良シ。又
次項「シヤルラツハ」Rノ第二用法ニ從ヒ、那篤倫濾液ヲ加フレハ濃稠ナル
溶液ヲ得、染色時間ヲ大ニ短縮シ得ベシト云フ。

(1)「シヤルラツハ」R

Scharlach R 脂肪紅 Feltiponeau, $C_{24}H_{30}N_4O_8$ 暗赤色ノ粉末ニシ
テ、水、酸類、亞爾加里、僱里設林ニハ全ク不溶性ニシテ、氷醋酸、脂肪、
巴拉賓、嘔嘔仿誤ニ溶解ス。亞爾箇保爾ニハ赤色、濃硫酸ニハ青色ニ溶ク。
「シヤルラツハ」Rヲ始メテ脂肪染色ニ應用シタルハ Michaelis 氏ナリ。
氏ハ其色調「ズダン」IIIヨリモ濃厚ニシテルヲ脂肪質ヲ染ムルヲ以テ「ガ
スミウム」酸等ニ遙ニ優レルモノナリト云ヘリ。尙ホ神經髓鞘(變性シタ
ルモノモ)「リボグローム」ヲモ染色スト。氏ハ七十%ノ亞爾箇保爾飽和液
ヲ用キタリ。

Herxheimer 氏ハ此色素液ニ那篤倫濾液ノ少許ヲ加フレバ其溶解度ヲ増
シ、色調ヲ濃暗ナラシメ、從テ其染色ノ増進スルヲ説ケリ。Mayer 氏ハ本
色素ハ「ズダン」IIIニ比シテ敢テ優レル特色ナシト云ヘリ。

用法。

第一法

「ズダン」IIIノ用法第一法ノ如クス。七十%ノ亞爾箇保爾飽和液ニテ約十
五分間染色シ、僱里設林又ハ菓糖舍利別中ニ臍包ス。

●脂肪染色 (承前)

京都醫科大學解剖學教室 岡 島 敬 治

●●●●●
「ズダン」IIIノ用法。

第一法

Daddi 氏法。既ニ述ベタリ。

第二法

Rosenthal 氏法。

一、五耗厚ノ新鮮ナル材料ヲ「ヒクリン」酸ノ飽和水溶液ニ於ケル五%ノ
「フォルマリン」(二%)「フォルム・アルデヒド」中ニ固定スルコト二十四
時間。

二、少時流水ヲ以テ洗フ。

三、可及的非薄ノ截片ヲ作ル。

四、五十%ノ亞爾箇保爾ニテ洗ヒ、

五、七十乃至八十五%ノ亞爾箇保爾性「ズダン」飽和液ニテ染色ス。染色
時ハ強度ノ亞爾箇保爾液中ニハ十分時、弱度ノモノニハ三十分時ナリ。

六、一乃至二秒又ハ三十分時間五十%ノ亞爾箇保爾中ニテ洗フ。

七、永ク蒸餾水ニテ洗ヒ、

八、暫時明鑒「ヘマトキシリン」又ハ「ヘマヲウン」中ニテ染色。蒸餾水洗

第二法

Herxheimer 氏法。氏ハ那篤倫液ノ添加ニヨリ其染色時間ヲ著シク短縮セシメタリ。其理由ニ就テハ既ニ理論ノ條ニ於テ述ベタリ。

染色ノ順序、操作ハ第一法ト異ナルコトナシ。染色時間ハ二乃至五分時ニテ足レリトス。色素液ノ處方次ノ如シ。

無水亞爾簡保爾

七〇・〇

十%那篤倫滴液

二〇・〇

蒸餾水

一〇・〇

「ミヤルラツ」Rヲ飽和溶解セシム。

Herxheimer 氏ハ又「アツェトン」ト七十%ノ亞爾簡保爾等分液ニ色素ヲ溶解シ、一乃至二分時間染色シ、七十%ノ亞爾簡保爾ニテ洗滌セバ其染色力著シク促進セラル、ヲ見タリ。

(三)「ニルブラウ」

Nilblau [B], $(C_{18}H_{16}N_3O)_2SO_4$ ハ綠色ノ粉末ニシテ水ニハ難ク、亞爾簡保爾ニハ青色ヲ以テ易ク溶解ス。其水溶液ハ鹽酸ニヨリ紫色、那篤倫滴液ニヨリ赤色ノ沈澱ヲ生ズ。硫酸ニハ黃色ニ溶解ス。

本色素ハ I. Smith 氏ニヨリ始メテ應用セラレタルモノニシテ、Schmori 氏ニヨリ賞賛セラレ、後一般ニ其効力ヲ認知セラル、ニ至レリ。中性脂肪ハ鮮紅色ニ、脂肪酸及ビ其鹽ハ深青色ニ、細胞核ハ暗青色ニ、細胞體質ハ鮮青色ニ染色ス。カクノ如キ色彩變調ヲ來ス理ニ就テハ既ニ理論ノ條ニ於テ述ベタリ。

Aschoff 氏ニヨルバ「ニルブラウ」ハ中性脂肪ヲ帶紅色ニ、遊離脂肪酸ヲ青色ニ、「ビヨ」ニステリン・エステル及ビ其混合物ヲ弱帶紅色ニ、「フォスファチード」ヲ深青色ニ染色スト。又川村氏ニヨルバ中性脂肪ヲ赤色ニ、「ビヨ」ニステリン・エステル及ビ其脂肪酸トノ混合物ヲ帶赤色ニ、「スフィンコミエリン」ヲ弱帶青色ニ、「ケファリン」、脂肪酸及ビ石鹼ヲ深青色ニ染

ムト。

用法。

用法ハ極メテ單簡ナリ。

一、濃厚ナル水溶液ヲ以テ十乃至二十分時間染色。

二、根本的水洗。又ハ Schmori 氏ニ從ヒ一%ノ氷醋酸水ヲ以テ辨色シ

テ水洗シ、

三、偏里設林又ハ偏里設林阿膠中ニ臍包ス。

(四)「インドフェノール」

Indophenol [D. H.], Naphtholblau (Durrand) $C_{18}H_{16}N_2O$ 、1鹽基性色素ニシテ暗褐色ノ粉末又ハ泥狀物ナリ。水ニ不溶性ニシテ、亞爾簡保爾、依の兒、偏陣ニ易ク溶解ス。還元藥ニ逢フテ白色ノ「インドフェノール・イス」ニ變化ス。コハ空中ニ於テ酸化シテ再び青色トナル。

本色素ハ Herxheimer 氏ニヨリ始メテ使用セラレタルモノニシテ、脂肪ハコレニヨリ青色ニ染ム。

用法ハ七十%ノ亞爾簡保爾ノ濃稠液ヲ用キテ約二十分間染色ス。其他ノ順序、操作ハ「ズダン III」ニ於ケルモノト同シ。「リチオン・カルミン」ヲ以テ對照染色ヲナセバ美麗ナル象ヲ得ト云フ。

(五)「ノイトラル・ロード」

Neutraltrot [C.] 又 [D. H.] $C_{18}H_{17}N_3Cl$ 鹽基性色素ニシテ綠黑色ノ粉末ナリ。水ニハ赤色ヲ以テ容易ニ溶解ス、蒸餾水溶液ハ其色鈍ナルモ、稀釋セル有機酸ヲ加フレンバ「フクシン」赤トナリ、稀薄亞爾加里ニヨリ黃褐色ヲ呈ス。亞爾簡保爾ニハ赤褐色ヲ以テ溶ケ、其稀薄液ハ黃褐色ナリ。

本色素ハ鹽基性實例ヘバ細胞核、Zell 氏顆粒、粘液、軟骨質等ヲ赤色ニ、酸溶性質(細胞體質等)ヲ黃色ニ染色ス。本色素ヲ始メテ脂肪染色ニ應用シタルハ Albrecht 氏ナリ。Aschoff 氏ニヨルバコレニヨリ遊離脂肪酸ハ深赤色、那篤倫誤及ビ加留誤石鹼ハ帶黃色、「フォスフノチート」(「ツ

「エレンブロシード」ハ深赤色ニ染ムト。川村氏ニヨルバ結果全ク同一ニシテ、反應ハ既ニ寒冷ニ於テモ現ハルト云フ。

(六) 其他ノ染料

其他ノ染料ハ既ニ前條ニ述ベタル如ク種々アレドモ、一般ニ應用セラルルコト稀ナリ。

尙ホ茲ニ注意スベキハ、既ニ千八百七十四年、Ranvier 氏ハ亞尼林色素ナル「ビノリンブラウ」(「チアニン」)ヲ以テ脂肪染色ヲ試ミテ好果ヲ得タリト云フモ、後 Ehrlich 及ビ Michaelis 氏等ハ真正ノ「ビノリンブラウ」ハ脂肪ヲ染色スル性質ヲ有セザルコトヲ云ヒ、Ranvier 氏ノ用キタルモノノ果シテ純粹ノ同色素ナリシヤ否ヤ疑ヘリ。

四 其他ノ方法ニヨル脂肪染色

本項ニ記載セントスルモノハ悉ク特殊ノ方法ニヨルモノニ屬ス。即チ脂肪ト銅、脂肪ト銅及ビ「ハマトキシリン」、又ハ脂肪ト格魯謨ト「ハマトキシリン」ノ「ラック」ヲ作ラシムルモノ、及ビ中間液ニ溶解シ易キ脂肪質ヲ一定ノ方法ヲ以テ不溶性質ニ變ゼシメ、後脂肪染料ニヨリ染色スルモノ等コレナリ。

茲ニ注意スベキハ鐵及ビ石灰質ハ、銅ノ作用ヲ受クルコトナキモ、好シデ「ハマトキシリン」ト「ラック」結合チナスコトコレナリ。カ、ル疑ハシキ場合ニハ、鐵分ハ「ベルリ―ネル」膏反應ニヨリ證明シ、石灰ハ稀薄鹽酸ヲ用キテ溶解セシメテ鑑識ス。

(一) 銅・銅「ハマトキシリン」ノ「ラック」法

Benda 氏ハ壞死脂肪組織ニ來ル脂肪酸ノ結晶及ビ脂肪酸石灰ニ「Weigert 氏ノ神經膠質媒染料即チ醋酸銅ヲ作用セシムル時ハ青色ノ反應ヲ現ハスヲ發見シタリ。氏ニヨルバ脂肪酸ハ銅ト結合シテ青色ノ鹽ヲ作ルモノニシテ、カクノ如ク古キ脂肪酸ニ鹽類ガ再結晶スルコトナクシテ生ズル現象ハ「ブソイドモルフイスマス」ト稱スベシ。而シテ油酸ニハ此反應ノ發現容易ニ

シテ、寒冷ノ狀態ニ於テモ來ルモ、硬及ビ軟脂酸ニハ四十度又ハ沸騰點ニ溫ムル時始メテ現ハル。其結晶ハ透過光線ニハ海綠色、落下光線ニハ青色ヲ呈ス、偏里設林ニ貯フルモ變化スルコトナク、明鑒「ハマトキシリン」又ハ Weigert 氏ノ「ハマトキシリン」ニテ對照染色ヲナセバ鮮麗ナル象ヲ得。又「フォルマリリン」ニテ固定シタル材料モ陽性ノ結果ヲ現ハストイフ。

カク油酸ノミガ速ニ反應スルハ、Michaelis 氏ニヨルバ、「オスミウム」酸ニ見タル如ク、油酸ト銅トノ結合性ニ因ルモノニアラズシテ、却テ半流動ノ狀態ガ主トシテ原因チナスモノナルベシト。即チ他ノ脂肪酸ニ油酸ヲ混シテ柔軟トナセバ、亦其反應容易ニ現ハル。

Benda 氏法

一、組織片ヲ二乃至四日間 Weigert 氏ノ銅格魯謨明鑒醋酸媒染液(一、五瓦ノ格魯謨明鑒ヲ百瓦ノ水中ニ溶解シ、コレニ五瓦ノ普通醋酸ヲ加ヘ、最後ニ五瓦ノ粉末中性ノ醋酸銅ヲ加フ。此液ハ久時ニ耐ユ)ト十%ノ「フォルマリリン」ノ混液中ニ固定ス。

二、凍法截片製作。

三、「ズダン」H 染色、又ハ「ハマトキシリン」ニテ細胞核ヲ染色ス。

純粹ノ醋酸銅液(濃厚)ノミヲ用フルモ此反應ヲ呈スト云フ。

Benda 氏ノ變法。

一、「フォルマリリン」固定、次デ神經膠質媒染液ニテ媒染ス。

二、良ク水洗シ。

三、七十乃至九十%ノ亞爾爾保爾ニテ脫水。

四、殘餘ノ水分ハ亞仁林油ニテ除去。

五、亞仁林油ハ「アツェトン」ニテ除去。

六、「アツェトン」ハ偏陣ニテ除去。

七、巴拉賓。

此後ノ操作ハ以上ノ順序ヲ逆行ス。

八、菓糖飽和水溶液中ニ絨包ス。

Fischer 氏ハ銅ヲ作用セシメタル (Kupfernシタル) 脂肪酸及ビ其鹽類ガ、Weigert 氏ノ「キトキシリン」ニ對スル反應ヲ檢シテ陽性ノ結果ヲ得タリ。

今試ニ純粹ノ石鹼ニ醋酸銅ヲ加フレバ青綠色ノ沈澱ヲ生ズ。此銅石鹼ヲ其ク洗滌シ、水ヲ以テ稀釋セル Weigert 氏ノ「ヘマトキシリン」液ヲ加フレバ、一乃至數時間ニシテ黑色ニ變ズ。此作用ハ溫度ノ高キニ從ヒテ迅速トナル。カクノ如クシテ生ジタル銅「ラック」ハ酸類、瀾液等ニ對シテ抵抗強ク、Weigert 氏ノ辨色液ニ溶解スルコト難シ。故ニ此辨色液ヲ用ユレバ周圍ノ「ヘマトキシリン」ハ全ク除去セラレテ特選性染色ヲ得。

今組織中ノ石鹼ヲ檢センニハ先ヅ十%ノ「フォルマリン」ニテ固定ス。然レドモ脂肪酸ノ那篤留誤及ビ加留誤鹽類ハ「フォルマリン」ニ溶解スルヲ以テ、豫メ不溶性ノ加爾叟誤鹽ニ變化セシムルヲ要ス。此目的一ハ鹽ニ撒里失爾酸加爾叟誤ヲ飽和度マテ加フ。茲ニ石鹼ハ悉ク脂肪酸加爾叟誤トナル。コナ「クツバルン」シ、次デ「ヘマトキシリン」ニテ染色ス。

「ヘマトキシリン」ハ九十六乃至百%ノ亞爾簡保爾性ノ稀薄液トシテ用ユレバ、水分多キ液ヨリ其効顯著ナリ。

Fischer (及フ Gross) 氏法。

一、脂肪酸及ビ脂肪酸石灰ハ十%ノ「フォルマリン」ニテ固定シ、脂肪酸加留誤及ビ那篤留誤ニハ十%「フォルマリン」ニ撒里失爾酸石灰ヲ飽和度マテ加ヘタルモノヲ以テ固定ス。

二、凍沍切片ヲ二乃至二十四時間孵卵器中ニテ醋酸銅ノ濃厚液ニテ媒染ス。

三、蒸餾水ニテ洗フ。

四、善染ノ Weigert 氏ノ「キトキシリン」液「キトキシリン」ニ瓦、

無水亞爾簡保爾十耗、蒸餾九十耗、濃厚炭酸「リチウム」液一耗)ニテ最短二十分時染色ス。

五、稀釋シタル Weigert 氏ノ辨色液(赤色血瀾鹽二、五瓦礫砂二瓦、蒸餾水百耗)ニテ赤血球ノ脫色スルマテ辨色ス。

純醋酸銅ヲ用ユレバ赤血球モ脫色スル利アリ。

六、蒸餾水ニテ根本的洗滌ス。

七、「ズゲン」IIニテ中性脂肪ヲ染色シ得。次テ偏里設林絨包。又ハ亞爾簡保爾、「キシロール」、拔爾撒誤。

Fischer 氏法ニヨリテ脂肪酸及ビ其鹽類ハ最小滴ト雖ドモ深黒ニ染色ス。Holmsen 氏ハ本法ヲ賞賛シテ脂肪酸及ビ石鹼ノ檢査ニハ最モ確實、合理的ニシテ且ツ簡單ナリト云ヘリ。

Aschoff 及フ川村兩氏ニヨレバ本法ハ遊離ノ脂肪酸及ビ石鹼ニノミニ陽性ノ反應ヲ現ハス。

(一) 格魯謨「ヘマトキシリン・ラック」法

I. Smith 氏ハ Weigert 氏ノ神經、結、染色ノ理ヨリシテ、種々ノ脂肪體ヲ檢シテ「クロミールング」Chromierungノ後ニ來ル「ヘマトキシリン・ラック」ノ形成ニ就テ研究シ、次ノ成結ヲ得タリ。未飽和ノ脂肪酸及ビ其結合體即チ特ニ油酸ハヨク「ラック」ヲ形成スル性質ヲ有ス。硬及ビ軟脂酸ハ然ラズ。又「ヒヨレンステリン」ト油酸又ハ他ノ脂肪酸例ヘバ「ラウリン」酸ノ混合物ハ油酸ノミヨリハ遙ニ容易ニ「ラック」形成ヲ現ハス。

Smith (及フ Dietrich) 氏法。

一、凍沍切片ヲ一乃至二日間「フォルマリン」中ニ固定ス。

二、三十七度乃至四十度ノ溫ニテ重格魯謨酸加里ノ飽和水溶液中ニ二十乃至四十八時間浸置ス。

三、水洗。

四、Kulschitzky 氏醋酸「キトキシリン」液「キトキシリン」ニ瓦ヲ

亞爾爾保爾一乃至二片中ニ溶解シ、二%ノ醋酸水溶液百珎ヲ加フ) 中ニ三十七乃至四十度ニテ四乃至五時間。

五、水洗ノ後一夜 Weigert 氏ノ辨色液(前出)ニテ辨色ス。

六、根本的水洗ノ後葉糖中ニ臙色ス。

「サフラン」ノ後臙色ヲナシ得。

Aschoff 氏ニヨレバ本法ハ未飽和中性脂肪ニハ陽性ノ反應ヲ呈シ、川村氏ニヨレバ「フォスファチド」、「ツエレプロシド」、「ヒヨレンステリン」脂肪酸混和物、脂肪酸及ビ石鹼ニハ陽性ノ結果ヲ來ス。然レドモ脂肪酸及ビ石鹼ニアリテハ其反應稍緩漫ナリト云フ。

(III) Ciaccio 氏法

Ciaccio 「レチチン」及ビ其類似體ト他ノ脂肪體トヲ區別シテ臙色スル方法ヲ發見セリ。即チ「レチチン」及ビ其類似體ニ重格魯謨酸ヲ働カシメテ脂肪溶解料ニテ不溶性ノ物質ニ變化セシメ、コナ更ニ脂肪色素ヲ以テ臙色セリ。

Kasurinoff 氏ニヨレバ、本法ハ油酸「ヒヨレンステリン・エステル」、軟脂「ヒヨレンステリン」、「レチチン」及ビ羊脂ニ陽性ノ結果ヲ現ハスト云ヒ、Aschoff 氏ハ「ヒヨレンステリン・エステル」及ビ其混和物ニ反應スト云フモ、川村氏ニヨレバ「ケフアリ」及ビ其混合物、脂肪酸及ビ石鹼ニノ陽性ノ反應ヲ現ハスト云フ。

方法。

一、二十四乃至四十八時間 Ciaccio 氏固定液中ニ固定。

五%重格魯謨酸加里

百珎

「フアルマリン」

二十珎

蟻酸

五乃至十滴

「フアルマリン」中ニ貯藏セラレタル組織モ亦水洗ノ後、此液中ニ固定セラレ得。

二、三乃至八日間、三十五乃至三十七度ノ溫ニテ、三%ノ重格魯謨酸加里液中ニ浸置。

三、二十四時間流水中ニ洗滌。

四、十二時間七十%亞爾爾保爾、十二時間八十五%、又十二時間九十五%亞爾爾保爾。

五、一時間無水亞爾爾保爾(交換)、一時間無水亞爾爾保爾ト硫化炭素又ハ「キシロール」混和液、一時間純硫化炭素又ハ「キシロール」(交換)、一時間四十度ノ溫ニテ硫化炭素巴拉賓飽和液、一時間五十二度ノ熔融點ヲ有スル巴拉賓、半時間六十度ノ巴拉賓。

巴拉賓切片ハ後普通一般ニ應用セラル、法ニヨリ、「ズダン」II及ビ「マティン」ニテ臙色ス。即チ「ズダン」IIニテ三十乃至四十時間。五十乃至六十%ノ亞爾爾保爾中ニ洗フ。水洗「マティン」(Apathy 又ハ Ciaccio 氏ノ) 又ハ「ヘラウ」(Mayer 氏)ニテ臙色。

「ズダン」IIノ代リニ「シャルラツ」Rノ如キ他ノ脂肪色素ヲ用ヰ得。

(四) Golodetz 氏法

從來知ラレタル多クノ「ヒヨレンステリン」反應ハ顯微鏡術ニ應用スルコト困難ナルモ、Golodetz 氏ハ皮膚切片ニ用キラルベキ新法ヲ報告セリ。川村氏ニヨレバ本法ハ「ヒヨレンステリン」ト脂肪酸混合物ニ陽性ノ反應ヲ呈スト云フ。其方法左ノ如シ。

「ヒヨレンステリン」ヲ檢センニハ二法アリ。

一、濃硫酸三分ト三十%ノ「フアルマリン」三分ヲ混シタル液ヲ以テ處置スレバ、「ヒヨレンステリン」ハ黑褐色ニ染ム。

二、一二滴ノ三格魯兒醋酸ヲ働カシメタル後、一滴ノ三十%「フアルマリン」ヲ加フレバ「ヒヨレンステリン」ハ深青色トナル。

「ガキシヒヨレンステリン」ハ一滴ノ三格魯兒醋酸ニヨリ直ニ綠色ニ臙色ス (完)

引用書目

(1) **Altmann, R.**, Die Elementarorganismen. Leipzig 1894. (2) **Aschoff, L.**, Zur Morphologie der lipoiden Substanzen. Ziegler's Beiträge. Bd. 47 1910. (3) **Benda, C.**, Eine makro- und mikrochemische Reaktion der Fettgewebs-Nekrose. Virchow's Arch. Bd. 161 1900. (4) **Berner, O.**, Histologische Untersuchungen der Organe bei Fettgewebsnekrose. Virchow's Arch. Bd. 187 1907. (5) **Böhm, A.**, und **Oppel, A.**, Taschenbuch der mikroskopischen Technik. München und Berlin. 1908. (6) **Busch, Ch. K.**, Über eine Färbungsmethode sekundärer Degeneration des. Nervensystems mit Osmiumsäure. Neurol. Bd. 17 1898. (7) **Giaccio, C.**, Contributo alla conoscenza dei lipoidi cellulari. Anat. anz. Bd. 35 1909. (8) ———, Über das Vorkommen von Lezithin in den zellulären Entzündungsprodukten und über besondere lipoidbildende Zellen (Lezithinzellen). Centralbl. f. path. Anat. Bd. 20 1909. (9) **Cori, C., I.**, Beitrag zur Konservierungsmethode von Tieren. Zeitschr. f. wiss. Mikr. Bd. 6 1889. (10) **Daddi, L.**, nouvelle méthode pour colorer la graisse dans les tissus. Arch. Ital. Biol. T. 26 1896. (11) **Eisenberg, P.**, Über Fettfärbung. Farbehe-

mische und histologisch-technische Untersuchungen. Vischow's Arch. Bd. 199 1910. (12) **Fischler, F.**, Über die Unterscheidung von Neutralfetten, Fettsäuren und Seifen im Gewebe. Centralbl. f. path. Anat. Bd. 15 1904. (13) **Fischler, F.**, und **Gross, W.**, Über den histologischen Nachweis von Seifen und Fettsäuren im Tierkörper. Ziegler's Beiträge. VII Suppl.-band 1905. (14) **Golodetz, L.**, Wodurch ist die Osmiumsäurereaktion der Fett bedingt? Zeitschr. f. wiss. Mikr. 1911. (15) ———, Neue Reaktion für Cholesterin und Oxycholesterin. Chemik. Zeit. 1908. (16) **Herxheimer, G.**, Über Fettfarbstoffe. Deutsch. med. Wochenschr. Jahrg. 27. 1901. (17) **Handwerk, C.**, Beiträge zur Kenntnis Verhalten der Fettkörpers. Zeitschr. f. wiss. Mikr. Bd. 15 1898. (18) **Hansen, C. C.**, Über die Ursachen der metachromatischen Färbung bei gewissen basischen Farbstoffen. I Teil. Ebenda Bd. 25 1908. (19) **Holthusen, H.**, Über den histologischen Nachweis verschiedener Fettarten mit Rücksicht auf das Verhalten des Fettes in den Lymphknoten. Ziegler's Beiträge Bd. 49 1910. (20) **Kahlden und Gierke, E.**, Technik der histologischen Untersuchung pathologisch-anatomischer Präparate. 8 Aufl. 1909. Jena. (21) **Kasa-**

rinoff, Vergleichende Untersuchungen zur Histologie der Lipoiden. Ziegler's Beiträge. Bd. 49, 1910. (22) 川村麟也 Die Cholesterinesterverfettung (Cholesterinsteatose). Jena, 1911. (23) Kolossow, A., Ueber eine neue Methode der Bearbeitung der Gewebe mit Osmiumsäure. Zeitschr. f. wiss. Mikr. Bd. 9, 1892. (24) Ledermann, R., mikroskopische Technik. Wien und Leipzig, 1903. (25) Lee, A. B., und Mayer, P., Grundzüge der mikroskopischen Technik für Zoologen und Anatomen. Berlin 4. Aufl. 1910. (26) Lubarsch, O., Fettablagerung. Enzykl. d. mikr. Technik. 2. Aufl. Berlin und Wien, 1911. (27) Michaelis, L., Zur Theorie der Fettfärbung. Deutsch. med. Wochenschr. 1901. (28) ———, Über Fettfarbstoffe. Vischow's Arch. Bd. 164, 1901. (29) ———, Die indifferenten Farbstoffe als Fettfarbstoff. Deutsch. med. Wochenschr. 1901. (30) ———, Einführung in die Farbstoffchemie für Histologen. Berlin 1902. (31) ———, Fett. Enzykl. d. mikr. Tech. 1911. (32) Pappenheim, A., Grundriss der Farbstoffchemie zum Gebrauch bei mikroskopischen Arbeiten. Berlin 1901. (33) Poll, H., Osmiumsäure. Enzykl. d. mikr. Tech. 1911. (34) Rosenthal, W., Ueber den Nachweis von Fett durch Färbung. Bericht d. path. Gesell. II, 1900.

(35) Samter, M., Eine einfache Methode zur Markierung sehr kleiner farbloser, schwer färbbarer Objekte bei der Paraffineinbettung. Zeitschr. f. wiss. Mikr. Bd. 11, 1894. (36) Smith, L., The staining of the fat with basic anilin dyes. Journ. of path. and bact. Vol. 11, 1906. (37) ———, On the simultaneous staining of neutral fat and fatty acid by oxyzine dyes. Ebenda. Bd. 12, 1907. (38) Schmorl, G., Die pathologisch-histologischen Untersuchungsmethoden 3. Aufl. Leipzig 1910. (39) Schulz, G., und Julius, P., Tabellarische Uebersicht der künstlichen organischen Farbstoffe. Berlin. 1888. (40) Schulze, M., und Rudneff, M., Weitere Mitteilungen über die Einwirkung der Osmiumsäure auf thierische Gewebe. Arch. f. mikr. Anat. Bd. I, 1865. (41) Starke, T., Ueber Fettgranula und eine Eigenschaft des Osmiumtetroxydes. Arch. f. Physiol. Jahrg. 1895. (42) 鈴木文太郎 顯微鏡及鏡査術式 東京 明治四十三年 (43) Ucke, A., Ueber Fettfärbung. St. Petersburg. med. Wochenschr. 1908. (44) Zimmermann, A., Botanische Mikrotechnik. 1892. (45) Ueber trübe Schwellung und Fettdegeneration. Verh. d. deutsch. path. Ges. VI, 1904.

漫 録

● 刑法と醫師

法學博士 花 井 卓 藏

本篇は岡山に開催の藝備醫學會に於て花井博士が口演せられ醫海時報誌上に掲載せられたるものを茲に轉載す

醫師の職業權、醫術上の過失、喜死法又は穩死法、業務上の秘密、證言の拒絶權、新マルサス論、人士流産

諸君予は全く本會の目的たる醫學の研究に就きては門外漢なり、從て此に辯舌を弄するの資格を有せず、反て諸子の卓説を聴くの資格を有す、然るに同郷の先輩、吳、富士川兩君より屢本會に強制執行を以て引き出さるゝの光榮を有す云ひ度きも寧ろ迷惑を有す、然れども人間は奇異のものにして屢せらるゝときは終に感化せられ、法律と醫術との關係も離る可らざるものたるを會得し、吾人をして其間の關係を研究するの念を起さしめたり今に至りて兩君の厚意を感謝する次第なり、若し兩君なかりせば、法律と醫術との關係を知らずして終りしならん。

予は嘗て法律と醫術との關係を國家醫學會に於て述べたり、今日は其の範圍を狭くし刑法と醫師に就て刑法領分中醫師の業務に關係ありて、醫師の寸時も忽にす可らざる事柄に就て述べ、然れども予は法律家にして醫學者より導かれて醫學に接近したるの故を以て諸君を法律に導かんとするの惡意を有するものにあらず。

事々物々知らざるを以て最大の幸福とす、之を知れば何事にも警戒の念強くなり、且憶病となる、然れども其の憶病は醫術に於ては病者の幸福となるものなり、刑法上醫師に關する事項二十五を算するも茲に述べんとするに以上掲ぐる七題なり、然れども其述る事柄は簡單にして分り易きを主とし業務上の參考に資し得らるゝを得ば幸甚。

此機會に於て、醫師の職業を法律が如何に認むるかの點に就て一言せん、醫師は法律上營業ならずして職業と認めらる、辯護士も同く職業と認めらる、其の職の公私に關せず、執る處の業務は利益を眼前に置くにあらず、人の身體、生命、財産を保護するものとして特別の待遇を法令に示せり、醫師辯護士は人格と智識とを基とする公の職業なり、社會も亦此等の人々を俟つに如上の感念を以てし、從て授けられし權利や甚だ大なり。

刑法は人の身體を傷るを禁じ、人の身體を傷害せしものは十年以下の懲役に處すと規定せり、然るに醫師に向つては職業の權利として必要の場合人の身體を傷る事を許せり、醫師の職業權上最重大なるは、此の刑法を犯し得ることにして、其の任務重く充分の警戒をなして疾病治癒せば可なり、若し治癒せざるときは醫師は人を傷け人を殺して罪を免れ得るや否やを決せざる可らず。

西洋に於ても成文律なき當時、已に醫師に一種の權利を與られたり、或人は此を習慣上權の利なりと云ひ、又人の生命を救ふを以て目的とせる故、刑罰現定の除外例なりと云へり、然に現今は諸國刑法にて明に此の權利を定め、我刑法は三十五條に於て明に此權利を定め、法令又は正當の業務により爲したる行爲は之を罰せず、とせり、即ち醫師の職業を行ふ上に於て其目的物たる人體の生命を救ふに、傷害行爲を爲さずば其の目的を達し得ざる爲め、又傷る爲め、死するも其の故意に出づるにあらずれば罰せずとせり。又刑法中風俗上の問題として最も法律の忌む所謂、公然猥褻の行爲をなすは風紀上何人も其の不可なるを知る、我刑法百七十四條には是れな

罰する規定あり、然るに醫師は其の疾病の陰部に關する際、又は之を暴露する必要ある際は、男女の陰部を暴露して其の職權を行ふ、此る猥褻の行爲をも刑法は醫師に向つて許せるなり。

醫師は正當の職務上人の身體を傷るの權利あるも其の權利を行ふに於ては制限あり、其制限を越れば其の越たる點に於ては假令故意ならずとも尙責任あり、即ち此は醫師の過失にして此際過失の責あり、醫術上の過誤には醫學上の原則に背きて術を施すにより、又は必要の注意を怠りしにより、患者の身體に傷害を加へし時にして、即ち診斷の不適當、療法の不合理より生ず可きなり。

予は此問題に付き諸君に望む、診斷の不適當、療法の不合理は素人之を知らず、裁判官知らず、患者知らず、世間知らず、之を知るは醫師其の人に於て自己の意思に訴ふるときは明なり、裁判官知らず、世間知らず、患者知らざるの故を以て、醫師の過誤は無責任の裡に葬られ、患者は身體に傷害を受けながら黙して忍ばざる可らざるは哀む可き事共なり世界萬國醫學的智識を有せざるものにして、醫師の過誤により生ぜし傷害を忍ばざる可らざるもの幾許ぞ、斯る際に醫師は罰せられずして反て其の罪深し、自己の學識に訴へ且専門家丈け其れ丈け素人を治療するに當ては慎重に注意し、責任の重きと、人之を見るの明なきを思ひて充分の注意を乞ふ次第なり。

若し是が法廷の問題となり、醫學上の原則に背きし爲め、又は必要の注意を怠りしとの明なる際は、刑法は職業權なりとして之を許さず、世間知らざるも學問智識に従ひ其を應用して治療を施すものが必要の注意を怠りて人を死傷せしめしときは、刑法は第二百十條を以て之を罰し、三年以下の禁錮又は千圓以下の罰金に處す、只醫師の過誤は人之を知らざるを以て其の例少きのみなり、刑法は以上の處罰を行ふ也、行政上職業權の停止となり、社會問題としては、其醫師に對する患者の欠乏を來し、終に學び得たる智識を抛ち、門前雀羅を張り、糊口に窮するに至らん、醫師の過誤

により施せし傷害に對しては、我國に比し諸國其の罪重く、獨逸にては五年の禁錮に處し、罰金の選擇を許さず、其他の國の法制も多くは五乃至七年なり、此事實より見るときは我國に於ては醫術上の過誤より人の人體生命を傷るもの少き爲め、是れが法律上に現はれしものなるや、否やは未だ知る可らず、兎に角我國に於て刑罰の二年丈け輕減なるは本邦醫師の名譽を謂ふ可し、醫師職務上の誤りは富士川氏の言に従へば(一)不注意の診斷(二)不注意の治療(三)藥物の分量を誤りしときにして此三場合に於て必ず誤りを生ずるは疑を容れず、若し治療法宜しきを得ば疾病は治癒す可かりしを、不良の治療法の爲め反て重篤とし、或は又他の疾患を惹起し、此藥を應用せば治癒す可かりしを彼の藥を投ぜし爲め治せざりし場合の如きはれなり、治不治の堺は重病者にありては即ち生死の境なり、從て此際醫術上の責任の生ずるは當然のことたり、人の知らざる爲め又此事の現はるゝ事稀有なる爲め、若し一朝其の過誤の明となりし際は、益以て嚴重に之を罰せざる可らず。

實際現はれざる醫師の過誤は相當に起るもの、如し、戸矢部氏の綿馬越幾斯事件、木下教授のガセ問題等の如き然り此等は必要の注意を怠りしものにあらずとして處罰せられず、且民法上損害賠償をもなさざりしと雖、斯る事の醫界に起るは不吉の事とせざる可らず、其他吾妻博士の手術事件、佐武氏の「アドリナリン」中毒事件の如き此等何れも醫師の勝利に歸し居れるも、斯る名家、大家を有せざる山村、僻地に於て、醫師の少き地方に於ても、歴史を重ねられて開業せるものは、蓋し思半ばに過るならん、故に諸君の智識は貴重の人命に關する事を知り、刑法上の責任に問はれざる様、又問はるゝも法廷に勝を制するの覺悟なかる可からず。

本年一月三十日の判決たる、獨逸に於る誤診の一例を紹介せん、年齡十七年の女子にしてヒステリー性なりしが、誤病の爲め甲醫に診療を求めたり、然るに該患者は他に胸部に癰癤ありし爲め、甲醫は之を乙醫に紹介し、其

の母の同意を得て乙醫は麻酔の下に胸部に「パラフィン」注射の手術を行へり注射後患者は漸次沈鬱となりしより両親は大に之を憂慮し、大學に送りて「パラフィン」を胸部より除去せり、患者の両親は憤怒に堪へず、「パラフィン」注射の際麻酔せしは患者を姦淫せしものなりとて、乙醫を告訴せり、然れども此は無根の事とて處罰せられざりき、然るに又損害賠償の訴へを民事裁判に提出せり、其の主旨とする處は母のみの承諾にて娘の承諾なくして手術を施したりと云ふにありて、二萬マルクを要求せり、精神低能のものに両親の同意を得ずして手術をなすは刑法上の罪となるや否やは問題なり、然るに此の事件は十七年の女にして他醫の紹介により、且其の母の承諾ありしを以て刑法上の處罰を受けざりき、即ち醫術上の智識は患者、親族、世間の知らざるを以て益留意せられん事を望む、世の進歩發展に伴ひ周到の注意をなすも最通の汚名を被るゝとあり又傷害罪となることあり、若し法廷に於て醫師の勝訴とならば可なるも、若し敗訴せば其の不名誉之れより大なる事なる可し、又病者は疑ふて止まんより法廷に争ひて此の疑ひを決せんとするは日を追ふて熾となる可し。

喜死法又は糞死法 重篤の疾患にして全快の望みなく、氣息奄々として死期迫れる際、其の死に頻する苦痛を免れしめん爲め「モルヒネ」又は麻酔剤を用ひ、安穩に死に就かしむるを喜死法又は糞死法と云ふ、然れども死するにあらずして殺すなり、此は如何なる責に歸するや。所謂醫師の職業權として差支へなきや、又職業權を偷越したるものなるや問題なり、初生兒又は積年の疾病に羸瘦し、死の疑ふ可らざるを知りて其の苦を救はん爲め藥物等によりて之を殺せし時は、刑法は二百二條に於て之を處罰し、六月以上六年以下の懲役に處す、故に若し患者の家族にして惡意を挿むものあらば如何なる名譽を毀損せらるゝや知る可からず。

醫師の職業權に關し、法律は其の採る業務のみならず業務上の秘密は如何なる際も此を公にせざる權利を授く、刑法第三百三十四條醫師、藥劑師、藥

種商、産婆、辯護士、辯護人、公證人又は此等の職云々ある如く、醫師の秘密を暴露せし者は六月以上六年以下の懲役とすことあり、詭惡の人又は公の方より其の秘密を問はれし際に當り、此を拒絶し得ること是れなり、茲に實例を擧ぐれば、此に妙齡の處女あり將に嫁せんするに當り、關係人が主治醫に肺結核の有無を問ひしとき、醫師は其の處女の病狀を公にして差支なきや、否やを例に取りて研究せんこと、獨、佛、奧、國等の刑法は我國のものと同く、例之結核病者なるを第三者に知らしむるときは秘密を犯す者として罰せり關係人即ち緊る側の利益を保護する感念より、此の秘密を知らしむるは當然の如くなるも、秘密を守るは個人の權利、名譽を保護する法の精神なり。

故に社會一般の利益は法律は認むるものにあらず因て第三者の保護の爲め秘密を知らしむるも刑法の處罰を免れず、歐洲に於ては、此の際何等か特別の規定を設け、第三者をして秘密を守らしめて醫師の秘密を第三者に知らしめんとの議論をなすものもあるも、此は刑法の根本義に悖るものなり。今一例は、癩病治療の際其の疾病の未だ現れざるに當り、以上の如く結婚問題の起りしとき、醫師が症狀表白を肯せざりし爲め結婚し、血統正しき家系に、長に癩病を傳ふるを考ふる時は、第三者の爲め何等かの規定あり度き如きも、醫師の秘密を守るは個人を根本とせる故實際問題と法律の精神と一致せず、此は注意を拂ふ可き點なり。

病床日誌を患者の枕邊に放置して隨意他人をして之を披見せしめ、又は實驗報告を雜誌上に掲載するに當り、患者の姓名を記入せしは秘密漏洩とならざるも、多くの人目に觸る雜誌上に、患者の氏名を掲げしときは秘密漏洩の罪あり。

次に述べる例は獨逸に於る生命保險の問題なり、獨逸に於ては生命保險上の契約は屢々實際問題となり現はるゝ處たり、而して生命保險契約の際、保險會社に醫師團體は被保險人の證書を提出することゝなれりと云ふ、此は

毫も秘密を犯せしものならざるも、其の死後微毒等の如き不利の疾患たりし際は秘密を漏洩するものとして罪せらる、日本には未だ此種の前例を見ず。

前述の如く刑法は醫師に秘密を守る可き權利を與ふるを以て醫師は或場合、法廷に於て證言拒絶權あり、醫師が斯く證言を拒み得る範圍は、職業權上の一の問題なるも、其の範圍は業務上の秘密漏洩を罰するの表裏なる可きものなり。

「マルサス」の論旨によると、人口の増加は自然の趨勢なるに食物の供給には制限ありと、或舊藩にては、男兒一人女兒二人を以て限度とし、此れ以上子女を分娩する時は強制して之を殺さしめたり、此の「マルサス」論は學者の迎ふる所となりしが、現今に於ては其の論は實際上、道德上、勢力を失ひしも、近來「マルサス」式の新論現出せり、此は醫學上より研究す可き一問題なり、新「マルサス」論は避妊法なり、婦女に結核、糖尿病等の疾患ありて妊娠により生命の危険を來す際、又は精神病、酒狂、癲病等の爲め其の子孫蕃殖は人種衛生上、社會衛生上不利なるものとて斯る婦女に懷妊させざらん論旨なり、然し之が實行は「ルーテサク」、豫防藥が、精系切除術、卵巣切除術によらざれば此目的を達し得ず「ルーテサク」豫防藥、精系切除器、卵巣切除器等は販賣によりて之を求むるを得、然るに刑法は第百七十五條に於て猥褻の文書、圖書、其他の物を頒布若くは販賣し、又は公然之を陳列したる者は五百圓以下の罰金又は科料に處す、販賣の目的を以て之を所持したるもの、亦同じと規定し、英、獨等に於ても頒布販賣者を處罰す可き、然れども予は此の新「マルサス」論を歓迎す、蓋し其人其家其國家の利益となる際は、人口制限の理由以外に其の家に病を絶つて正當とすればなり。

吾人は善死法と新「マルサス」論とは何等かの方法に於て立法の精神を變更し之を施行する醫師の責任を問はず一方國民衛生、之が國家衛生上、實行

せられんことを望む。

人工流産就て最後に一言せん、肺結核又は心臓患者にして妊娠の爲め其疾病重くなり、尙進んで生命に危険を來すべき、醫師は斯る者に對し人工流産を行ひ得、此は刑法上何等意味なきものゝ如きも、近來行はるゝ妊娠中絶法は、醫師に於て責任なきや、否やは問題なり。刑法二百十四條の研究は未だ斷定し得ざるも差支なき者の如し、然し嚴格の意義にて觀察するときは、妊娠中絶法は第二百十四條以外に法律の改廢ある迄は行はざるを可とす。

終りに一言すべきは裁判上に於ける醫師の地位なり、裁判官は裁判を下すも、事の醫術に關するときは、其の裁判は醫師により行はる、人を殺し、火を放つは大罪なるも、知覺精神の喪失者は此の罪を問はず、其の知覺精神の喪失者なるや否やは醫學の知識により之を定む、此の際裁判權の根本義は、裁判官にあらずして醫師にあり、從て醫師は此の場合殺活權を有するもの、又民法上にも知覺精神喪失者は相續權を失ふ、行政上にては傳染病に對する施設、警戒、公衆衛生に關する問題の如き即ち醫師は相續權、行政權、財産生命を得失せしむるの權利を有す、此の知識は學問により得る也、其の知識は一度之を得るにより永久に存するにあらず、醫術の進歩は啻々乎として停止する所を知らず、從て此れが研究は學生の業たらざる可からず、醫師の學識は吾人法律家よりも人命を司る點に於て其任や重大なり吾人の先輩が△聲卓見を有せるに拘はらず、常に研磨を忽にせざるは其の意茲に存す、此心を以て生命を救ふ可く以て財産を保護す可く、以て行政權を行ふ可く、又裁判權を行ふ可し、予は行政權を受けるの一人として、裁判權を受けるの一人として、又他日病者となるの一人として醫家諸君に向ひ多大の尊敬を拂ふものなり。(完)

通信

●李廷摺君通信 (松原教授宛)

拜啓俗務の爲め久しく御無沙汰致し候處甚た失禮致候然て小生九月學始に
必ず歸澤致し候故相變らず諸先生の講陶を謹受致すべく候終りに諸先生の
健康を奉賀申上候

中華民國南京城北馬家福橋中華病院内

門下 李 廷 摺 脱帽

●原田悦五郎氏通信 (十全會宛。四十年卒業)

拜啓白晝之候御先生方を初め各位益々御壯健之段先以て敬賀の至りに奉存
候却説回顧すれば諸兄と御別れしてより茲に五年只々夢の如き思ひのせら
れ候卒業後暫く恩師山崎先生の御厄介に相成間もなく上京仕り研究一年有
餘にして四十二年の秋郷里に開業仕り候以來は日々同一のことを反覆する
のみにて何等の「アルバイト」も無之以前たる矣下の舊阿蒙慚愧此事に存
申候

小生も今秋にて開業滿三年に達し申候が追々患者も不絶來り今日に於ては
地盤も確定仕り益々奮闘致し面目を失せざる様致し居り候に付何卒御安心
被下度候同窓林田信平氏とは相去るこゝ里餘のこゝる屢々相會し居り候同
氏も卒業後福岡大學に於て皮膚科耳鼻科等を研究され目下郷里田主丸町に

於て耳鼻專門にて開業致され居り候處附近に於て斯科專門は同氏一人のみ
にて可なり流行致され居り候故御同様喜ばしき次第に存申候
尙いろ／＼御通信申上度きこゝも有之候へ共時節柄多忙に取紛れ右要用の
みあら／＼申上候

乍末筆御先生方初め各位の御健康を祈上候早々不具

福岡縣浮羽郡川會村

四十五年六月四日

原田 悦 五 郎

●福田美明氏通信 (松原教授宛、四十一年卒業)

拜啓其後は如何御消光被遊候や伺上候愈々入梅と相成亦ぞる暗濕たる天候
續きの北國を想起せられ實に物憂き限りに候富山市の近況は平和に候先月
赤十字病院内科長澤崎寛制氏去られ昨日醫學士市川行章氏來任せられ候小
生近來暇でもなく多忙でもなく一日中何さか五尺三寸の軀軀を働し居り候
間御安神被下度候目下神經病者を主と致し内科的及精神病的の患者も多少
有之候は一重に先生方の御陰と難有感じ居り候當地本年直江津と鐵路連絡
記念として明春聯合共進會開催の爲め稍景氣付居り候魚津の鯛網滑川の螢
鳥賊しん氣樓魚津地方亦近來漸く世人の耳目に達し來游者有之様に候當市
にも瓦斯電鐵の計劃有之由に候小生近日苦悶を有する患者に「アダリン」を
少量づゝ連用せしめ居り候が結果可良の様に思はれ候勿論一方臭素劑も用
ゐ候雖も拒絕症狀を有する者には水に溶して與へ候に適する様思はれ候
「アリドール」に極少量づゝが反て効力ある様に思はれ其は「アリドール」の
効は一種の精神的治療とも云ふべく其多量に患者に灼熱感を與へ反て面白
からざる様思はれ候間試み居り候勿論淺薄なる考より候まゝ御笑ひ被下
度候次亞機酸「カルシウム」は小生大に愛用仕り候其は散藥を主にし服用に
甚だ氣持よろしく且つ慘出性減少の作用も有之事先生にも學び候まゝ適應

症には可成用ゐる居り小生治療中の神經衰弱症患者中に眩暈を發し爲に不絶一種の鬱鬱性感情を有せる三名有之候が何れも沈經劑に沃剝を併用仕り輕快仕り候が何れも血壓は一〇密突位高く有之候は全く輕度腦血管硬結症の上に神經衰弱症を併發せしものにて此藥劑にて神經衰弱症の症狀だけ快癒せしものと思はれ候が少量の沃度劑の配合は心柄がよろしき様に思はれ候小生は専門科を標表せし爲郡部又多少遠地より來る人有之候今後内科の方面へ研究を向け度何卒今後は一層の御示導を仰ぎ上候(後署)

富山市鍛冶町十番地

六月十一日

福田 美 明

●小俣翰翁君通信 (十全會宛、四十四年卒業)

前略小生儀も幸に無事目下乙種學生以前(の練習學生)として在學罷在候の偏に母校諸先生の賜ものと深く感謝致居候、小生目下の生活狀況と小感とを併せ惡筆不文なも願みず御報道申上候

却説小生等は昨年十二月十四日任官と同時に海軍々醫學校乙種學生を命ぜられ申候在學期間に約半ヶ年にして本年の六月卒業するものに候、此の半ヶ年の間に海軍一般の智識を養へ且つ軍醫としての必要醫學を更に修得するが目的に有之候、由て學校は總てが海軍式にして敬禮、食事、起臥等所有一舉一動皆律あり、乙種學生は皆寄宿生活にして本曜日夕食後の外出と土曜日の午後より月曜日の朝迄は外泊する則に候、小生等入學以來日尙淺く加ふるに母校在學當時の下宿住居と異なり不規律は禁忌なるが故に他嬌せられ自正せんとするもナカゝ至艱に有之候

入學後は廿五日迄約一週日は調服や敬禮法の練習に日を送り廿五日より漸く一箇の軍人として外出を許され申候、御承知の如く東京は海陸の軍人衆多にして外出時には生等敬禮法不熟の徒は大に苦心仕候此の頃は自分な

ら稍々圓滑になしうる様に感じ居り候、尤も正規としては本校は十二月廿一日より一月九日迄冬期休暇に有之候へども生等新任者は特に滯京して卅日には年末御祝詞言上及任官御禮の爲め參内、一月二日には朝參拜賀に參内、五日に新年宴會あり而して此の十日に本校の始業式あり十一日より漸く學課を受けつゝ有之候

本校の學級は研究科學生、甲種學生、乙種學生、の三種有之候研究科の方は中監少監等の中の希望有志者に候、甲種學生は主に大軍醫の入學するものに候、乙種學生は即ち小生等の如き新任者の入學するものに候、小生等の方は今期採用のものゝみにして全員卅三名に候、其の内譯は今期の志願採用せられたるもの二十五名、大學の方の委託學生八名に候、等級別にせば中軍醫十、中藥劑官一、少軍醫十八、少藥劑官一、少軍醫候補生二、少藥劑士候補生一、に候、候補生の在學年限は一ヶ年に候卒業後始めて本官となるものに候、學課は中軍醫も少軍醫も一處になり受業致すものに候小生等同級者は少藥劑官一名を加へ合計十九名にして出身校別にすると慈惠醫院醫專七、仙臺五、熊本二、岡山二、千葉二、而して吾金澤は無慮一名其の一名が即ち小生とは、いかに一人が一番氣が揃ふてよいと人は云ふけれど少し物足らざる様の氣もせられ候、仙臺の如きは五人受檢して五人共採用せられ候由、金澤醫專の代表者としては小生の不學短才荷が重過ぎはせぬかと獨語致居候

何卒して四十五年度募集の時には頑強なる体格と中等位迄の學力を有せらるゝ士の奮起應募せられんことを希望致居候

何にを申すにも未だ入學早々にして學校の模様や海軍生活の狀況を御報道するの材料に乏しく第二信を期して御報道申上ぐる心意に御座候勿々頓首

東京海軍々醫學校にて

小俣 幹 翁

校内雜報

●植物採集の記 (五月三日)

閑あらば野に往き自生の植物を採集し暇あらば斯學の參考書を續く野外の採集よく其形態を知り得圖書よく之れが啓蒙たり野外の採集圖書の閱讀相特つて吾が同學者の智識の進捗に預る所多く延きては益々精密の研究を要する吾が生藥學上裨益する所少しとせずこの目的のために藥學科一學年廿七名五月六日二限より植物實習時間を愛割し林教授引率のもとに或は「ブラツェントロムメル」或は「プランツェンステーヘル」を携帯し各々部署し校門を出で道を東南にさり鈴見山方面に本學年度第三回目植物採集を行ひたり其の途中植物發見の隨所に所て精密なる先生の野外講義を聞き一同非常なる熱心と愉快とを以て鈴見山を縦横に縫ひ歩き殆ど食を忘るゝ有様にして殊に鈴見山中にて二尺に餘る天南星の一面に生ひるを刀を以て無遠慮にきり倒し「トランメル」に収め次の實習に之れが組織を顯微鏡下に研むる嬉しさこの有益なる好材料を得たるは一同の大に幸とする所なり午後二時空腹を抱へ大池附近に休憩し先生の有益なる生藥その他に關する話に一時間の経過するを忘れそれより一同ある大なる者に接觸し大に得る所あるか如き感想を生し浩然嬉々として歸校せしは既に三時半を過過る頃なりき今採集せし植物を左に載せん

毛茛科

黃蓮

キツネノボタン

キンボウゲ

カラマシソウ

タガラシ

天南星科

テンナンシヨウ

罌粟科

ムラサキケマン

クサノヲウ

唇形科

カキドウシ

メケサ

ナドリコソウ

車前科

ナウバコ

三白草科

シフヤク

龍膽科

フデリンドウ

荳科

フジ

コマツナギ

ミヤコグサ

ゲンゲ

スズメノエンドウ

菊科

タンポポ

ザシバリ

ノゲシ

アザミ

ハハコグサ

ケシアザミ

忍冬科

ヤマデマリ

ハコネウツギ

スイカズラ

ニハトコ

毒空木科

ドクウツギ

水龍骨科

綿馬(チシダ)

クダヤクシダ

ノキシノブ

ワラビ

シシガシラ

百合科

シヤウジャウバカマ

アマドコロ

石竹科

ハコベ

ツメクサ

睡蓮科

シユンサイ

處耳草科

トリアシシヨウマ
岩梅科

イハカガミ
沙草科

マスケサカ
ヤツリグサ

梨科

イロナシ

小薺科

イカリサウ

茜草科

ヤエウグサ

玄參科

サギゴケ

酢漿草科

カタバミ

遠志科

ヒメハギ

燈心草科

ミヤマズメノヒエ

薔薇科

ヘビイチゴ

ミツバツチグサ

ノイバラ

十字花科

ナズナ

タネツケバナ

ミツタガラシ

禾本科

スズメノカタビラ

スズメノテツボウ

ニハホコ

莖菜科

スミレ

ツボスミレ

薇形科

サマノミツバ

薇科

ゼンマイ

石松科

ヒカゲノヤズラ

地錢科

ゼニゴケ

土馬騷科

ヒメスギゴケ

石南科

イハツツジ

漆樹科

フシノキ

(藥學一年N, S, 生記)

(丁)

●第七回香林會 (五月二十六日)

五月廿六日午後三時から當市在住の本校藥學科卒業生の組織して居る四三會と合併して大手町舊本校病理室で開催した、會員出席四十餘名來賓加藤靜雄氏あり、定刻になるに林幹事の開會の辭に併せて左の如き演題の下に各々得意の辯を振られた。

一、山草の培養に就き

林 常 雄氏

四三會の生れたのが四十三年の事であるその夏に白山から舞鶴草を採取せられて培養せられて今年三年目で初めて花を開いた然し四三會も三年目だが未だ花を見ぬと結論せられた、思ふに蓋し先生の熱誠と努力を有する四三會が未だ花も實もないは實に奇怪な事だ、要するに他の四三會員のいつも顔を見せぬ人達に吾人の誘力ある強大な『イマナチオン』を今後分配したら如何と思ふよ、呵々。

一、藥學科會設立の趣旨

石野 金 朔君

例の底力のある音聲を張上げて藥學科會設立の趣旨、胚胎の原因、計畫に付いて縷々數萬言を費された、單簡に云はば、活社會に活動するには——團結一致——之をするには——先輩後輩の疏通連絡——するには——科會の必要と満足なる説明を與へられた。

一、同會の事業と財務

越 知 麟 太 郎 君

君は同會の内容たる雜誌の刊行、圖書室の設置等に付いて方法次第を委細に述べ財務根原、用途、豫算等に關して論及説明せられた。

一、同會機關雜誌とその内容

宮 田 榮 君

科會に於て劈頭第一になすべき機關雜誌の体裁、内容記事、欄別などに就いての考へを述べて併せて雜誌の良否は記事の如何内容の貧富にあり故に諸兄の投稿を迎ふるなりと。

一、我が科の現在、過去、未來

塚 田 彌 三 君

同君は藥學科の過去に於ける概況一班、卒業生の數その動靜及び現在の狀況、將來の運命等數字的に現はして吾科の進運を説明せられた。

一、所 感

神田 興 敬君

林先生の『イマナチオン』説に勧誘せられて第一高弟ニ即座になつて盛に『イマナチオン』説を吐かれたので門徒直に多數を得られた。

一、香林會に就いて

吉野 祐三 郎君

吾香林會の産れ落ちてより今日迄の育立、及内容、意氣に就いて四三會員へ紹介の勞を取られた。

一、『アダリン』に就いて

安達 鈞 吉君

最近の優良新藥『アダリン』に就いてその構造、性状用法、効力、等を細微に論ぜられた、最後に良藥なるもその高價に閉口す、安價なる製法なきを恨む。

一、朝鮮談

中村 重 好君

久しく滯鮮せられて今回歸られたる同君は朝鮮に於ける風土、氣候、人情等より引いて吾々藥劑師の狀況、慈惠院の内容、到る迄精しく話され大に益する所があつた。

茲於茶菓の供應を受け別の如き藥學科會設立趣意書を配布した、次には

一、所 感

加藤 靜 雄氏

同氏は所感と題して氏の在大學時代の時間割、實習等の事に就いて話した、これで豫定の演題を終つて餘興に移つた、が當日は他の諸會、遠足等で各種多藝多能の士の欠席を遺憾とするが先づ石野君の例の薩摩琵琶、吉野君の『バイオリン』外數番の餘興終つて閉會を告げた、趣意書は次の通りである。

趣 意 書

茲ニ我藥學科ノ既往ヲ願ルニ今ヤ年ヲ經ル二十餘歲人ヲ育スル幾百ノ多キニ及ビ尙年々歳々擴張ニ擴張ヲ加ヘ益々斯界ノ爲メ道ヲ開クノ

士ヲ出スヲ思ハバ誰カ欣然タラサルモノアラン、然レドモ悲ナル設吾科ノ先輩ト後輩ノ連絡ニ見ルナク又過去ノ狀況ヲ知ルノ記載ヲ得ルニ苦シム實ニ吾人ノ遺憾ノ極ナラズヤ、先年先輩有志諸氏此ニ思ヲ致シ六花會ヲ設立セラレシモ爾後杳トシテ聲ナキハ實ニ千秋ノ恨事タラズンバ非ズ、

吾人在學生一同コ、ニ於テ痛切ニ同會ノ廢絶ヲ歎キ併セテ叙上ノ意ヲ以テ此ニ金澤醫學專門學校藥學會ヲ設立セントス、然シテ第一嚆トシテ機關雜誌ヲ刊行シ專ラ先輩ト後輩トノ連絡疎通ヲ計リ或ハ又先輩ノ實驗、經驗ヲ載セテ後輩ニ告グ或ハ母校ノ現狀ヲ書シテ卒業生諸氏ニ報ジ更ニ各人ノ意氣動靜ヲ揭グ會員ニ通ジ大ニ志ノ存スル所ヲ示シ以テ協力團結ノ偉大ナル効果ヲ收メ斯界ノ大勢ニ向ヒ猛進突破セント欲ス、然レトモ吾人等若輩ノ集合ナレバ到底單一ニシテソノ成功覺束ナキハ万人ノ認ムル所、茲ニ一言以テ先輩ノ熱誠ナル同情ト助力ヲ乞フヤ切ナルモノアリ。

明治四拾五年六月

金澤醫學專門學校藥學科

生徒 一同

叙上ノ趣意ヲ賛ス

金澤醫學專門學校藥學科

教官 一同

●第十二回講話部大會記事 (五月二十五日)

青葉若葉に風匂ひ若き血潮の高鳴りか自然の胸をゆるがして響く十全の理想叫びん大會は五月二十五日午前十時から幽蘭薫るがやうな新しい大講堂で開かれた

一、開會の辭

下平部長

徳高く望重い新部長は堂々たる体軀慈愛深き溫顔にて今から開會する本日は天氣晴期である又我々の心も清新である諸君の抱負を清らかに述べられよ。

一、短歌に著したる醫學思想

中西與三郎君

短歌に自己の個性を著すに尤も妙而も醫學的に歌へる少し吾人醫業に携はる者餘暇樂まば興味深からむさて自己偶作ならちれ君の手術を見て「クロロホルム」かぎつゝ眠る御聲のかすれ行くにも胸つまるなり」の一首を示さる。

三、醫と僧と

村山良平君

醫と僧の和洋に於ける活動や歴史やその引鑑を「ローマンチック」の言葉で活された。

四、衛生學上より見たる金澤市

岡田新雄君

君が本問題を北國新聞上に論じ大に市民に衛生思想を與へしもの即ち雨濕氣氣溫土地土壤空氣に付て大に所見を述べられた。

五、現代精神的文明の退歩

木村武夫君

世は只滔々として物質的の文明に心酔し精神的文明の退歩せるの悲しさよ而も修養の途にある學生に此の退歩なきやあると。

六、吾人は如何なる人物たらむか

吉川誠君

思へきや此の隠れたる雄辯家あらむと君は人物に三種超絶平凡平凡下ある何れを理想とすべきやと批評し引証し發表し述べらる。

七、俳諧趣味

藤戸謙次君

人は一定の趣味生活を要す乾ける生活を潤澤せむには此の趣味を味へて終つて午食休憩。

一、所感

鈴木外男君

午後一時君が昇壇一投石の小波も集りて船を覆さん一技の細流も合して大

海なる細かき修養を忘れざれと。

二、酒は百毒の長なり

松崎清博君

酒の種類成分作用應用より人身に對する作用中毒豫後を述べ絶体に排斥せられた本精問題の八ヶ間敷い今日面白く聞かれた。

三、成効

曾我逸雄君

君は醫二の雄辯家である落付いた態度で眞の成効はその結果の如何は問はぬ奮闘の結果の自覺如何だ進取的に憂き事の猶此の上に積れかしだ逆境にもめげず順境にも安ぜざれと。

四、滑稽趣味

豐岡曾喜三君

君既に滑稽の人而も眞面目の君である心の曲つた人の笑や滑稽には愉快な催さぬ眞面目な滑稽は人世を平滑にするに然りハハハ。

五、氣力

本正生君

今の世はハイカラだハイカラな者は凡て弱い弱いものは役に立たぬ強い体心を持って君は既に強き氣力と身体を持つ好漢それ自重せよ。

六、感化の力

神谷他見男君

強い聲は強く反響す弱い聲は弱くひびくやうに心靈上の反響もそだ家庭や社會やの感化の力は今更偉大に慎みて正しかれと。

七、士三日見ずんば刮目して待て

松江常行君

君は醫三の好個の辯士だ雄心盛んな青年よ神の氣吹きは濟生の高き使命を辱めざれ努力發展せむかなと。

八、古池や蛙飛び込む水の音

五十嵐齋君

君は見るも夢覺むるも夢樂觀も悲觀も靜に思靜かに考て初めて解決かつき後活動となるのだ恰も苔むし草生に木繁れる忘れられたあの古池の靜さ一丁の蛙飛び込み靜を破る靜に機を持つて雄飛せんかなと。

九、大阪行き

高橋邦次郎君

君や我校の雄辯の士靈る熱誠の士篤實の君である母校の意氣と元氣を示す

べく鐵路幾百里大阪關西學生聯合演舌會に赴かれた報告談である詳細は君の報告文を本誌に投ずる。

附不肖(河口委員)は此の機を利用して講話部を代表して出演辯士に對する會計報告寄附金感謝の志を述べた。

十、血族結婚問題飛驒白川村

楠田利一郎君

社會醫學を研究せらる君暇あれば單身孤筈西走東奔その確證を捕へんとして居る曰く遺傳の本態血族結婚自己統計等を示し且叫んで曰く吾れ本問題の爲めに一身を貢獻せん他日比谷原頭本問題を持して立たん日諸君余のために聲援を呑む勿れと元氣盛なるを賀す。

十一、落選感

山田病院長 山田謙次先生

先生は我れ良醫たらずんば良相たらん的の而も良醫である醫政を叫べんため代議士候補に立たれし事前後二同時未だ來らず世未だ來らず僅少の差にて落選せられた先生は學校生活の様な單純の考では社會の試験は「パス」せぬよとて社會と國家醫師の本旨狀態自己政治社會の立志動機政黨の種類撰擧の腐敗醫師の覺醒に付て親切に教へられた正に余等頂門の一針深謝せねばならぬ。

十二、小兒發育の經過

竹多乙三郎氏

氏は主に小學生に付き其の發育が毎年規則的か否かを統計し身長胸圍体重男女變調期に付て説かる得る所から厚く御禮を申し上ぐる。

十三、「レントゲン」照射上の生体卵巣位置検査

岡田申吉君

君は獨乙の雜誌を譯して話さる。

十四、小兒肺結核の病理

岡本講師

先生は深達の獨逸語にて教へられた傍聴子は半ば解し半ば難解であつたのが悲しい然し此れが「アデクアーテ、ライツ」になつて幾多の獨乙語熱心者ができたらう先生に厚く御禮を申し上げます。

十五、所感

高安校長

拍手に迎へられつゝ謹嚴の態度慈愛の笑を浮べつゝ先生は過日土京中大隈伯に招待せられ同仁會の話があつたさて日々襲ひ來る醫業難に狹き邦國に互に相せめぐより慈隣支那方面の大舞臺に發展せよ餘暇此の志あるものは支那語を修められよと。

十六、子宮癌の早期診斷

藏光教授

子宮癌の全身症狀を呈せざる間に早期手術をなさば所謂再發を免るもの多し既に全身症狀を呈せば醫師は拱手して患者の死期を待つのみ慘又慘ならずやされば早期診斷實に必要なりさて血清沈降反應切片標本作製染色検査法最近の五六法を教へられた。

十七、歐洲の精神病學界(承前)

松原教授

先生は今日チユリヒの見物だ大學にはプロイレルや助手のユンガが居る精神病は非常に發達して居る殊に臨床的研究が中々精密で殆ど腦の解剖や顯微鏡的研究よりも「アナムネーゼ」を非常に重じ「アツソチアチオン」の試験が盛んだ之の學派の祖フエルズフト氏が「オソリチイ」で誘因を探すのに重きを置いてゐるのだ「アシコガルバノメーター」も使つて居る又腦の解剖に有名なモナコフ氏は臨床的症狀に重きを居かれてゐるミユヘンでは現代精神病界の粹クレベリン助手のアルツハイメル、グッテン、スベヒトがなるさ坐して身後の邊にあるの思ひせり。

十八、閉會の辭

下平部長

あはれ盛んなりける午後の會も七時の時を開きてはさて部長は立ちて閉會の辭を告げられ併せて辯舌の修養の等閑視すべからざる事獨乙語を熱心にやる事に付て深く〳〵戒められた。

長い日も最う暮れんとしてゐる會員が去つた會場の窓により落ちついたらしい空氣の中に憩へばわが心は靜に思ふ十全會會員を海外にあるの士那内にあるの士よ至る所幸あれ至る所福あれさらば今年の大會よ!!

「美しく咲ける言葉の花にまた。知らぬ匂ひも思はれにけり」(河口生雲言多罪)

※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※

叙任及辭令

●陸軍省

豫備被仰付(五月三十一日)

陸軍一等軍醫 日野信次(三年)

●海軍省

千早軍醫長兼櫻乗組橋乗組 海軍大軍醫 小出貞次郎(三年)
兼櫻乗組被免(五月二十九日)

●石川縣

金澤病院醫員(眼科) 齋藤友一(四年)
願ニ依リ職務ヲ免ズ(五月九日)

金澤病院醫員(外一) 古屋榮二(四年)
願ニ依リ職務ヲ解ク(五月二十九日)

五月三十一日

警察醫 吉田宗一(四年)

小松病院院長兼小松警察署勤務ヲ命ズ

金澤病院醫員ヲ命ズ(十二級俸) (眼科) 小島隆義(四年)

金澤病院醫員(内二) 中本和三郎(四年)

願ニ依リ職務ヲ免ズ

六月十日

金澤病院醫員ヲ命ズ(十二級俸)

同上

六月十一日

金澤病院醫員(外二) 太田尙男(四年)

依願職務ヲ解ク

六月十八日

金澤病院醫員ヲ命ズ(十二級俸)

金澤病院調劑員ヲ命ズ(月給拾七圓)

金澤病院醫員(婦人科) 浦晴二(四年)

願ニ依リ職務ヲ免ズ

●金澤醫學專門學校

金澤醫學專門學校外科學副手 古屋榮治(四年)
依願囑託ヲ解ク(五月三十一日)

金澤醫學專門學校外科學副手 馬詰定衛(四年)

依願囑託ヲ解ク(五月三十一日)

金澤醫學專門學校產科學婦人科學副手 浦晴二(四年)

依願囑託ヲ解ク(六月六日)

金澤醫學專門學校醫學士 天野隆義(四年)

外科學副手ヲ囑託ス(六月十三日)

月手當金貳圓給與

人事

●館保二氏の開業披露

全氏は明治三十九年本校醫學部を卒業して一年志願兵となり陸軍三等軍醫に昇進して我金澤病院眼科醫局に入り高安博士の下に多年眼科學を熱心に専攻せられしが其學識益々深くなり其手腕の益々圓熟せらるゝに及び終に昨年十二月金澤病院を辭職して上京せられ河本博士を初め諸大家を訪歴して各大家の得意とする長所を拾ひ更らに名古屋、京都、大阪等の諸名手に接して益々得る所あり終に故郷越中に歸省し高岡市に一大醫院を新築して開業せらるゝに當り去六月八日其披露の宴を全市景望樓に開かれたり招待に應じて金澤より出席せる者は高安、山崎、佐々木、宮田、松原諸教授、長會我部軍醫部長、藤井伊之吉、岡本京太郎、八田智証、石坂直次郎、佐崎、影山、佐竹、馬場の四醫員諸氏なり其の他全地の開業醫士諸君及名望家を合せて百餘名に上り初め館氏の招待の辭に次て高安氏は恩師として、山崎氏は病院長として、松原氏は同窓總代として祝辭を述べ向は長會我部軍醫部長、全市醫家總代、市長等多數の祝辭ありて中々の盛宴なりき。全氏の『館眼科醫院』は高岡市の中心たる欠原町にあり既に好位置を占めたる上に其建築も宏大頗る美觀にして眼科の治療及研究上に必要なる一式の機械及び設備の嶄新にして且つ完全なること未だ嘗て他に見ざる所なり。此完全なる設備と學識と經驗とを有する全氏の成功は期して待つべきなり。全市には既に吾校出身の眼科大家大澤五月あり今更に館氏を加へ全地眼病者の幸福亦大なりと謂ふべし。

●古屋榮二氏

(四十年卒業卒業)卒業後久しく外科一部醫員として敏腕を振はれしが今回辭職の上陸軍脚氣調査の依託により能州軸倉島に脚氣病を調査中なり。

●中川善松氏

(四十一年度卒業)今般朝鮮駐劄憲兵隊司令部附に補せられ忠清北道清洲憲兵隊本部に在勤。

●鈴木彌氏

(四十三年度卒業)は卒業後金澤病院眼科に於て研學後東上濱病院にて婦產科を修められ昨冬歸澤再ひ金澤病院外科一部にて研究中の處今回能美郡寺井野村にて開業さる謹て成功を祈る。

●太田尙男氏

(四十三年度卒業)卒業後外科一部に醫員たりし氏は今度丹波國柏原病院の副院長として榮轉さる。

●寺尾敬三氏

(四十四年度卒業)卒業後神經科に於て研究中なりし氏は今回豐橋病院の醫員とならる。

●加勢順之助氏

(四十四年度卒業)卒業後内科二部に研究中なりしが今回福井市河野病院にて患者治療に従事さる。

●安達鋪吉氏

(四十四年度卒業)は卒業後金澤病院調劑員たりしが今回辭職の上京都帝國大學附屬病院藥局に轉勤さる。

●居所不明會員簿

左記の諸君は肩書の御住所に會誌發送仕候へ共戻り來り候へは御存知の諸彦は御手数ながら十全會雜誌部へ御通知被下度願上候

雜誌部

舊住所

新潟市私立長谷川病院

朝鮮大邱同仁病院

富山縣下新川郡入善町

新潟市白山浦町一丁目一二九

松本歩兵五十聯隊ヨリ

小田利吉

西尾岱抱

米澤恭次

寺本於苑男

滿洲歩兵第二十二聯隊へ廻送濟辰

鯖江衛戍病院附

東京大學病院小兒科

岐阜縣岐阜病院

靜岡縣富士郡吉田町富士病院

大阪衛戍病院

東京軍醫學校

歩兵五十五聯隊

金澤市傳馬町

東京日本橋本材木町二丁目七

東京市本郷區弓町一丁目二九

金澤市立川町林病院

越後中頸城郡柿崎病院

歩兵第九聯隊

山本幹雄

原直壽

梶川甚一

長村吉太

服部暢助

岡勝重

江藤潤一

下村義郎

佐々木辰實

渡邊順吉

角田耕六

八賀重造

宮澤徳次

朝日 晃

會 告

●十全會規則改定の件

明治四十五年六月十二日本會協議會ニ於テ會則第十四條左ノ通り改定ス
會則第十四條第二項中但シ「以下三十六字」ヲ删除シ一ヶ年金壹圓ヲ下ヘ

「毎年二月末日迄」ノ八字ヲ加フ

但本條ハ八月一日納付ノモノヨリ實施ス

改正全文左ノ如シ

會則第十四條第二項

本校卒業生タル特別會員ハ會費トシテ一ヶ年金壹圓ヲ毎年二月末日迄ニ

納ムベシ

一、是迄特別會員ハ會費三圓を前納する時は向ふ五ヶ年を一期とし該期間
本會發刊の雜誌を配布したるも爾今此規則を廢除し毎年壹圓の割にて
幾年分にも前納すべきことなれり。要するに前納による會費の割
引法を廢したり。尙ほ各年度或は數年度分の會費を二月末日迄に納附
すること

此變更は來八月一日より實施す

二、茶話部を講話部に合併し從來茶話部にて行ひたることを爾今講話部に
於て擔當實行することなれり

附記。本會員にして會費未納の方少數有之候へ共思ふに之は各位が平素業
務多忙にして送金の餘暇なきと或は計らず失念せらるゝと或は郵便局
の遠隔せる爲めさに因ること確信せられ候。依りて本會は會費未納
の各位の御便宜を謀り爾今集金郵便法によりて會費を徵收仕度考に候
さすれば之によりて諸氏は居ながら各自宅に於て毫も不便なく會費を
納收せらるゝの便宜有之候故尙ほ豫め此事を御家族にも御傳達なし置
かれ度候さすれば御留守中に郵便脚夫が會費徵收に參り候ても不都合
のなき様になし置かれ度願上候

●自明治四十五年五月廿三日校外特別會員會費調書
至全 六月十七日

金額	期	限	氏	名
金壹圓	自四十四年度分		横	山 軫君
金參圓	自四十四年度分		藤	中 榮四郎君
金壹圓	自四十四年度分		高	岡 榮君
金參圓	自四十三年度分		原	田 悅五郎君
金五圓	自四十三年度分		加	藤 寛君
金貳圓	自四十二年度分		江	藤 幹君
金五圓	自四十三年度分		志	村 猪藏君
以上	自四十四年度分			



會 告

此十全會雜誌は從來醫學科及藥學科共同して發刊しつゝありしが各科の發展に伴ひ來る九月より各科分離して雜誌を發刊することゝなし醫學科の方は從來通りに本雜誌を毎月一日に發刊し藥學科の方は更らに別種の雜誌を發刊することとなり従ふて藥學科生徒及全科を卒業せられたる特別會員諸氏へは來八月限りにて本雜誌の配布を止め爾後は全一の會費にて別種の雜誌を配布することゝなれり。

謹
々
畏
々
テ

聖
上
陛
下
ノ
崩
御
ヲ

奉
悼
ス